

「将の器」―大山巖―

教育問題プロジェクト・チーム

榎本 眞己 陸自71

1 はじめに

人には器量というものがある。将軍には将軍の器量がある。その将軍の器量を「将の器」と言います。

この「将の器」という言葉は、将軍だけを対象に用いるのではなく、大きな組織のトップリーダーにも「あの人は将の器のある人だ」と言うように用います。

若い皆様にとつて「将の器」といってもピンとこないでしょうが、リーダーにはリーダーとしての力量や風格があるのです。そしてその力量や風格はリーダーとなれば、自然と備わるものでなく、若い時から様々な学習や経験等の「学び」を通じて、身に付けることができるのです。

そこで本日は、この「将の器」を考える上で、二つの事例を紹介しましょう。一つは大山巖大将が日露戦争時に現地の最高指揮官としてどのような振舞いであったかを、もう一つは菅直人総理が東北地方太平洋沖地震に伴う福島第一原子力発電所事故にどのような

に対処したか、です。そしてこの二人の事例を通じ、「将の器」の特性を考えてみましょう。

その後「将の器」を身に付けるべく、大山巖大将はどのような学習や経験等の「学び」をしたかを振り返ってみてみたいと思います。

2 事例研究

(1) 日露戦争時の大山巖大将

明治37(1904)年2月に日露戦争の火蓋が切られ、大本営は第1軍から第4軍を編制し、朝鮮半島および遼東半島に上陸させます。この際、大山巖は陸軍参謀総長、参謀本部次長は児玉源太郎(参照…先人の足跡22・2019年6月号)です。6月に満洲軍が創設されるや、大山巖が満洲軍総司令官に、児玉源太郎が満洲軍総参謀長となり現地で指揮を執ります。

この大山と児玉のコンビは日清戦争

時の陸軍大臣・次官のコンビから二度目です。言ってみれば阿吽の呼吸で結ばれた二人でした。大山は児玉の作戦を全面的に信頼し任せます。任せた以上は口出しをしない。そしてその結果に対しては、自分が責任を取ればよいと考えていました。

満洲軍は、鴨緑江、金州南山、遼陽に進攻し、10月の沙河会戦後、沙河の線でロシア軍と対峙します。

この時日本軍は、じ後のロシア軍の攻勢を翌年の解氷期以降と考え、旅順を陥落させた第3軍の北上を待ちながら越冬することとします。一方、ロシア軍は難攻不落と謳われた旅順を陥落させた第3軍の北上前に攻撃することとし、日本軍が全く予測していなかった厳冬の1月24日夜から2個軍で正面を拘束し、1個軍で日本軍の左翼を包囲すべく攻撃を開始します。10万の敵大部隊が黒溝台から沈且堡にかけて展開している日本陸軍の左翼に不意に一大攻勢を掛けてきたのです。ロシア軍の士気は凄まじく、日本軍の左翼を守っていた秋山好古支隊は苦境に陥り、黒溝台を占領されます。日本軍は25日正午、総予備の第8師団に黒溝台の敵の撃破を命じます。その8師団が応援に駆けつけている26日朝、さらに抜き差しならない窮地に陥るような状況の報告が司令部に飛び込んできま

す。それは秋山支隊がロシア軍に包囲されているというものでした。秋山支隊が崩れれば、ロシア軍は日本軍左翼を突破し、巨大な包囲網を形成することができました。

この時の状況を司馬遼太郎は『坂の上の雲』で次のように描写しています。

「総司令部も狼狽した。その狼狽ぶりには悲惨なほどで、参謀は悲鳴を上げるようにして電話口で怒鳴り、他の参謀は前線へ伝騎を駆けさせ…(中略)…参謀総長の児玉源太郎がささ、地図の前に立っていたかと思うと電話のそばへ走り、その間、参謀を怒鳴ったりして、部屋は喧騒を極めた…(中略)…この間、大山巖は姿を見せず、ずっと総司令官室のベッドで寝転がっていた。

「勝っているときは児玉サンにまかせます。負けいくさになれば、諸兵をまとめるために私が指揮をとらねばなりませんまい」とひとに言っていた…(中略)…その大山が、ついに灰神楽の立ったような作戦室にその肥大した姿を現した。児玉源太郎の机に近づき、室内を見渡しながら、「児玉サン、朝からだいぶオオツツ(大砲)が聞こえるようですが、一体どこですか」と言つたから、児玉は大山をみあげて言葉をうしない、若い参謀のなかには笑いをこらえる者もあり、やがて片隅からなごやかな笑い声が起こって、室内の空



大山巖(国立国会図書館蔵)

気は一変してしまった。

『はい。左翼に、だいが来ているよ
うです』児玉はやつと答えた。

『左翼ですか、それは苦勞なこと
です』と大山は言い、室内をゆるゆる
一巡してから自室へ引き上げてしまっ
た。黒溝台戦における最大の印象は大
山さんであった、ということをも、こ
場にいたほとんどの参謀がさまざまの
場所語り残している』

明治38(1905)年1月26日、黒
溝台にある最前線は生死の瀬戸際にあ
り、まかり間違えば滿洲軍は壊滅する
かもしれない。それほど重大な危機で
した。この切羽詰まった状況において
總司令官大山巖はのつそりと司令部に
現われ、寝惚けたような声で「児玉サ
ン、朝からだいがオオツツの音が聞こ
えるようですが、一体どこですか」と
言ったのです。「オオツツの音が聞こ
えるのが一体どこか」がわからないよ
うな状況どころではなかったのです。
しかし大山大将のこの言動により司令
部に漲っていた緊張感が一気にやわら
ぎ、冷静さが取り戻され、状況把握が
的確になったのです。

児玉をはじめ、全ての司令部員が本
来の冷静さを取り戻し、秋山支隊への
救援策を講じ始めます。26日夜以降、
第5師団次いで第2師団・第3師団の
主力を第8師団に配属して師団長・立

見中将の統一指揮の下に臨時立見軍と
して反撃させます。これにより三昼夜
にわたり激戦が展開されましたが、秋
山支隊の善戦もあり、28日夜になって
ロシア軍は攻撃を中止し、翌29日から
後退を始めるのです。

このようにみると、大山の大人のよ
うな風格こそが、児玉の才気煥発を発
揮させる源泉だったのです。

このような大山ですが、全てを幕僚
任せにしていたのではありません。児
玉が参謀本部を離れ現地に赴いている
間は、大山が自ら参謀会議を主宰し、
積極的に報告を求め作戦を指揮したと
いう記録が残っています。

(2) 菅総理大臣の原子力発電所事故対応

平成23(2011)年3月11日に東
北地方太平洋沖地震が起きました。福
島第一原子力発電所(以下「原子力発
電所」は「原発」と略す)では1〜3
号機が運転中で、4号機は定期検査中
でした。運転中の1〜3号機の各原子
炉は地震で自動停止します。また地震
により高圧線の鉄塔が倒壊したために
外部電源を喪失しますが、非常用
ディーゼル発電機が起動し、原子炉を
冷却する機能は維持されます。しかし
地震の約50分後にやってきた津波によ
り、地下に設置されていた非常用

ディーゼル発電機が海水に浸かって機
能喪失します。さらに電気設備、ポン
プ、燃料タンク、非常用バッテリーな
ど多数の設備が損傷・流出したために
全電源喪失(ステーション・ブラック
アウト)に陥りました。福島第一原発
の責任者である吉田昌郎所長は、過去

にこの原発の第1から第4までの全て
のユニット所長を務めており、同原発
に通暁しているだけでなく、「親分肌」
で部下思いのため現場の信望は極めて
厚いものがありました。その吉田所長
以下職員が全電源喪失という非常事態
の中、練り返される余震と闘いつつ原
子炉冷却を継続するため、取り外した
車のバッテリーを連結し計器の回復を
試みたり、要請した電源車を外部電源
として取り込む準備をしたり、さらに
は格納容器圧力の上がった1号機への
海水注入のためのライン構築やベント
準備等、今までにやったこともないア
クシデントマネジメントを死に物狂い
で行っていました。

このような中、政府は19時03分に「原
子力緊急事態」を宣言し、総理官邸に
原子力災害対策本部を設置します。そ
して20時50分には第一原発から半径2
km以内に避難指示を出します。また21
時23分には第一原発から3km以内に避
難指示、3km〜10km圏内に屋内退避指
示を出します。さらに翌5時44分に避

難指示対象を半径10kmに拡大します。
さらに現地の状況が十分に把握でき
ないことから、菅直人総理自身が事故
現場の福島第一原発を視察することを
決定し、12日7時過ぎにヘリコプター
でカメラマンらと共に事故現場に降り
立ちます。

このことを菅総理は政府事故調査委
員会の聞き取りにおいて「地震による
対応については松本防災大臣が中心で
やってくれました。こちらも勿論重要
なんですけれども、原発の方が非常に
(重要)、しかも私は多少の土地勘(筆
者注：東工大卒で原発について若干の
知識がある)があるので、全体は官房
長官を中心に、原発については、やは
り私が、常にフォローするという気持
ちがありました」と答えています。

また当日、福島県のオフサイトセン
ターに赴き、現地対策本部長として指
揮をとった池田元久経済産業副大臣は
同じく「政府事故調査委員会」の聴取、
あるいは事故後の自身のブログで、菅
前総理が福島第一原発をヘリコプター
により現地視察に来た時の様子と、そ
の際の総理の態度を次のように述べて
います。
「午前7時10分過ぎ、福島第一原発
のグラウンドで黒木審議官、内堀副知
事、武藤栄東電副社長とともに菅総理
を出迎えた。一行はそばに待機してい

たバスに乗り込んだ。(略)総理は武藤副社長と話し始めたが、初めから詰問調であった。「何故ベントをやらぬのか」という趣旨だったと思う。怒鳴り声ばかり聞こえ、話の内容はそばに居ても良く分からなかった。免震重要棟に玄関から入った。交代勤務明けの作業員が大勢居た。「何の為に俺がここに来たと思ってるのか」と総理の怒声が聞こえた。これはまずい。一般の作業員の前で言うとは、と思ひ、これには私はあきれました。武藤や寺田(筆者注)総理補佐官「寺田学」氏(筆者注)に言うならまだしも、一般の人の前で言ったので、イラ菅にしても今日はひどすぎるなと思つて。

今度は2階の会議室で菅総理は武藤副社長、吉田第一原発所長から、事故の状況説明を聴き、特に第一原発のベントの実施を強く求めた。吉田所長は総理の厳しい問い詰めに、「決死隊を作つてもやります」と答えた。(略)総理は、県副知事に対して、住民へのヨウ素剤配布などについて質問した。東電側だけでなく、副知事や班目委員長に対しても総理の口調は厳しかった。

(略)総理の態度、振舞いを見て、同行した旧知の寺田学補佐官に「総理を落ち着かせてくれ」と言わざるを得なかった。また、政権の一員として、同

席した関係者に「不快な思いをさせた」と釈明した。視察を終つて、総理がこの時期に現地視察をしたことと現地での総理の態度、振舞いについて、指導者の資質を考えざるを得なかった」

3 「将の器」の特性

日露戦争時の大山巖大将の満洲軍総司令官としての、また菅総理の原発災害対処時の、それぞれ一場面を通して、トップリーダーとしての「将の器」が垣間見えます。

そこで二人のトップリーダーに観られた相違点を通じ「将の器」の特性の一面を考えてみたいと思います。

(1) 全般を見渡す力

満洲軍総司令官の大山巖大将は司令部から一歩も離れず、全般を見渡していました。

一方、東北地方太平洋沖地震への政府の対応は地震・津波による被災対応と原子力事故対応の両者を同時に行わねばならないという極めて難しい対応が要求されました。そのような中で菅総理は福島原発を訪れました。それは菅総理が原発について他の大臣等と比較し知識があつたことから、地震・津波

対応を松本防災相に委ね、全体は官房長官に、自身は原子力災害対応に当り、まさに事故対応で躍起となっている現

場を訪れたため、政府及び東電職員が菅総理への対応に時間を取られることになりました。

トップリーダーが、自分の好き嫌いや得手・不得手等の理由で自ら一正面を担うべきではありません。

トップリーダーは全般を見渡し、現時点で処置・手当てすべきことに組織力を以つて当たるよう采配を振るうべきです。

すなわち「将の器」を有するトップリーダーは全般を見渡す力が必要なのです。

(2) 部下の力を存分に発揮させる力

大山巖は日清戦争時から児玉源太郎を副責任者として起用していました。このため児玉の能力を熟知しており、日露戦争時には全面的にその作戦指導を任せました。

しかし菅総理は、原子力事故災害対策責任者である海江田経済産業大臣を十分に使わず、自分が出張つてしまいました。しかも菅総理は、官僚を信頼していませんでした。菅総理が「全然俺のところへ情報が来ないじゃないか」といら立ちを表明するたびに、関係省庁の官僚が大急ぎで説明資料を作

成し、報告に上がりますが、説明を開き始めてまもなく、「事務的な長い説明はもういい」と追い出されるパターン

秀な官僚でもその力を発揮することはできません。

組織が大きくなると個人での対処には限界があります。ナポレオンは1度に5人の人の話が同時に聞けたとは言ふものの、5正面への対処が精一杯です。大きな組織になると対処すべき事項は同時に5カ所どころではなくなります。このため個人ではなく、組織で対処しなければなりません。そのためにも適任者を適任部署に配置し、配置された部下が自信をもって自分の力を発揮できるようにすべきです。

(3) 人を信頼する力

大山巖は自分の麾下将兵及び満洲軍総司令部員、就中参謀総長児玉源太郎を信頼していました。だからこそ満洲軍の作戦指導を児玉に任せただけです。しかし菅総理は、自分の力を過信する

だけでなく、大臣を支える官僚、官僚組織と似た大きな組織の東電、さらには自分が指名した原子力災害対処責任者たる経済産業大臣をも十分に信頼していませんでした。このため官僚の発言を封じるようになっただけでなく、「東電が福島第一原発から撤退すると

言っている」との話聞いた時、それを信じました。菅総理はもともと東電が官僚体質のようであり信頼していませんでした。このため「東電が原発から撤退」と聞いた時、「有りうべし」

と思つたのでしよう。そして東電本店に乗り込んで「撤退したら東電は百パーセント潰れる」と怒鳴りました。福島第一原発の当時の吉田所長はヒアリングで「例えば、(東電)本店から、全員逃げるとか、そういう話は」との質問に「全くない」と明確に否定しています。特に、吉田氏は「撤退」みたいな言葉は、菅氏が言つたのか、誰が言つたのか知りませんが、そんな言葉を使うわけがない」などと、菅氏を批判しました。

人への信頼感、猜疑心の強い人や物事を否定的・悲観的に捉える人より素直な人が持ち合わせています。素直でない人は人を疑います。疑われた人は疑つた人を信じません。「信頼」とは人を頼りにするものであり、頼られた人は何とくして頼つてきた人に応えようとするのです。

(4) 寛大でおおらか
組織の長の雰囲気は寛大でおおらかですと、部下はその力を十分に發揮することが出来ます。大山大將に次のような逸話があります。それは大正6年に西村文則氏が書いた『大山人』の中に収録されているものです。

「日露戦争の当時、奉天の軍司令部にあつて強敵がすぐ目の前に隙を窺っているうちにありながら、元帥平然たるもので、ある夜などは満洲でよく見

かける毒虫まむしといふのが出ると、元帥自身一生懸命それを追い回し、捕まえては空き瓶に入れ、翌朝それを机に置いて、司令部員に見せながら、「ほうら昨夜こいつを捕らえたわい」と大笑いされたことがある。大敵を前にして悠然たる元帥の風格、また欽す(注:喜ぶ)べきではないか」

戦争の真つただ中において総大將が児童にも似たことを見て喜んでゐるのです。そのことを見た・聞いた部下は、「おらが大将は余裕綽綽だ」と思うでしょうし、親しさも感じるのではないのでしょうか。このように寛大でおおらかな人は何事にも冷静に対応することが可能ですし、部下に安心感を与えます。さらには部下がのびのびと働くことができ、その持てる力を十二分に發揮することが出来るのです。

しかし菅総理は、いつもいらいらしているの、周りの人から「イラ菅」と呼ばれていました。まるで「大山人」と正反対です。

4 大山大將が『将の器』を身に付けて得た「学び」とは
(1) 大山大將の略歴

大山大將がいかにして「将の器」を身に付けたかを観る前に、その略歴を見てみましょう。
大山大將、幼名弥助やすけは、薩摩藩士・大

山綱昌(彦八)の次男として薩摩(現鹿児島県)城下加治屋町で天保13(1842)年10月10日に生まれました。父の彦八は西郷隆盛の父の弟で大山村に養子に入りました。このため西郷隆盛と大山大將は14歳違いの従弟の關係です。

幼い頃は薩摩藩独特の人材教育システムとも称すべき、武士階級の子弟で構成された「郷中」で教育を受けて育ちます。西郷隆盛がリーダーで、「やすけどん」と呼ばれ、読み書き(読書・習字)や薩摩武士の精神を学びました。

その後、同じ薩摩藩の有馬新七等に影響され過激派に属し、文久2(1862)年の寺田屋事件に参加します。このため帰国・謹慎処分となります。しかし翌年に起きた薩英戦争に際し謹慎を解かれ、砲台に配属されます。ここでイギリスを始めとする西欧列強の軍事力に衝撃を受け、幕臣・江川英龍の塾に入り黒田清隆らとともに砲術を学びます。

戊辰戦争では、新式銃隊を率いて、鳥羽・伏見の戦いや会津戦争などで各地を転戦します。また、12ドイム臼砲や四斤山砲の改良も行い、これら大山の設計した砲は彼の名を冠して「弥助砲」と称されます。
維新後の明治2(1869)年、渡

(1870)年から明治6(1873)年の間はジュネーブに留学します。

西南戦争では政府軍の指揮官(攻城砲隊司令官)として、城山に立て籠もつた西郷隆盛を相手に戦いますが、大山はこのことを一生気にしており、二度と鹿児島に帰る事はありませんでした。明治13(1880)年には陸軍卿となり、第1次伊藤内閣において最初の陸軍大臣となります。

日清戦争では陸軍大將として第2軍司令官となります。そして日露戦争では満洲軍総司令官を務め、日本の勝利に大きく貢献しました。

大正4(1915)年には内大臣となり、翌大正5(1916)年、大正天皇に供奉し福岡県で行われた陸軍特別大演習を参観した帰途に胃病で倒れ、胆嚢炎を併発。療養中の12月10日に内大臣在任のまま薨去しました。享年75。

(2) 少年期の「郷中」教育

6歳になった大山大將は、当時薩摩藩にあつた「郷中」と呼ばれる地区別の青少年の教育組織に入り、郷中頭の従兄にあたる14歳上の西郷隆盛から薫陶を受けました。

これは早朝の読書が終わると、家に戻り朝食を取り、その後、午前は広場や神社で、例えば「坂道達者」という言葉があるように坂道を走つて体力を

(3) 青年期に多くの厳しい事(利他)を体験

武芸の稽古をします。一日の終わりに郷中の仲間同士で車座になり、学んだ内容を確認しあいます。なお早朝の読書でどのような書籍を読んでいたかを見てみると、次のようなものです。

大山は20歳で寺田屋事件に関わり、21歳で薩英戦争に参戦します。

『四書五経(四書とは『大学』『中庸』『論語』『孟子』、五経とは『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』)の他に、歴史書では『史記』『資治通鑑』『神皇正統記』等を学び、軍事書では『三国志』『十八史略』『源平盛衰記』『太平記』等です。

そして、26歳から27歳の間には戊辰戦争に参加しています。人は往々にして「金持ちになりたい」とか「有名な人になりたい」とか「大きな家に住みたい」等の利己的な実現に努力を傾注しがちです。しかし大山は青年期に国事に目覚め、戦争という生死のかかった厳しい務め(利他)を経験したのです。

また大山巖は生涯で3回も海外渡航をしています。最初は明治2(1869)年に27歳で渡欧し普仏戦争などを視察しました。次は翌明治3(1870)年にアメリカ、ヨーロッパを訪問する半年間の旅です。この間、造船所大砲製造所等を視察します。そして帰国8カ月後の明治4(1871)年11月から明治6(1873)年まで再度欧州に留学します。この間、フランスの士官学校を研修します。さらにオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会(1873・8)には1カ月の滞在の中に29回も会場を訪れたとの記録があります。最初は大砲をはじめとする兵器の事や兵学を学ぼうと留学したのですが、これらだけにとどまらず近代文明にも関心が赴いたと思われれます。

このように多感な青年期に少年期に培った精神を糧にして、利他の厳しい務めを通じてながら真剣に生きたのです。しかも3回の海外渡航は大山をして見聞を広めさせるだけでなく、国外から自分を始めとする日本という国を客観的に見詰め直させたと思われれます。

『詩経』『礼記』『春秋』の他に、歴史書では『史記』『資治通鑑』『神皇正統記』等を学び、軍事書では『三国志』『十八史略』『源平盛衰記』『太平記』等です。

また大山巖は生涯で3回も海外渡航をしています。最初は明治2(1869)年に27歳で渡欧し普仏戦争などを視察しました。次は翌明治3(1870)年にアメリカ、ヨーロッパを訪問する半年間の旅です。この間、造船所大砲製造所等を視察します。そして帰国8カ月後の明治4(1871)年11月から明治6(1873)年まで再度欧州に留学します。この間、フランスの士官学校を研修します。さらにオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会(1873・8)には1カ月の滞在の中に29回も会場を訪れたとの記録があります。最初は大砲をはじめとする兵器の事や兵学を学ぼうと留学したのですが、これらだけにとどまらず近代文明にも関心が赴いたと思われれます。

『詩経』『礼記』『春秋』の他に、歴史書では『史記』『資治通鑑』『神皇正統記』等を学び、軍事書では『三国志』『十八史略』『源平盛衰記』『太平記』等です。

また大山巖は生涯で3回も海外渡航をしています。最初は明治2(1869)年に27歳で渡欧し普仏戦争などを視察しました。次は翌明治3(1870)年にアメリカ、ヨーロッパを訪問する半年間の旅です。この間、造船所大砲製造所等を視察します。そして帰国8カ月後の明治4(1871)年11月から明治6(1873)年まで再度欧州に留学します。この間、フランスの士官学校を研修します。さらにオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会(1873・8)には1カ月の滞在の中に29回も会場を訪れたとの記録があります。最初は大砲をはじめとする兵器の事や兵学を学ぼうと留学したのですが、これらだけにとどまらず近代文明にも関心が赴いたと思われれます。

『詩経』『礼記』『春秋』の他に、歴史書では『史記』『資治通鑑』『神皇正統記』等を学び、軍事書では『三国志』『十八史略』『源平盛衰記』『太平記』等です。

また大山巖は生涯で3回も海外渡航をしています。最初は明治2(1869)年に27歳で渡欧し普仏戦争などを視察しました。次は翌明治3(1870)年にアメリカ、ヨーロッパを訪問する半年間の旅です。この間、造船所大砲製造所等を視察します。そして帰国8カ月後の明治4(1871)年11月から明治6(1873)年まで再度欧州に留学します。この間、フランスの士官学校を研修します。さらにオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会(1873・8)には1カ月の滞在の中に29回も会場を訪れたとの記録があります。最初は大砲をはじめとする兵器の事や兵学を学ぼうと留学したのですが、これらだけにとどまらず近代文明にも関心が赴いたと思われれます。

『詩経』『礼記』『春秋』の他に、歴史書では『史記』『資治通鑑』『神皇正統記』等を学び、軍事書では『三国志』『十八史略』『源平盛衰記』『太平記』等です。

また大山巖は生涯で3回も海外渡航をしています。最初は明治2(1869)年に27歳で渡欧し普仏戦争などを視察しました。次は翌明治3(1870)年にアメリカ、ヨーロッパを訪問する半年間の旅です。この間、造船所大砲製造所等を視察します。そして帰国8カ月後の明治4(1871)年11月から明治6(1873)年まで再度欧州に留学します。この間、フランスの士官学校を研修します。さらにオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会(1873・8)には1カ月の滞在の中に29回も会場を訪れたとの記録があります。最初は大砲をはじめとする兵器の事や兵学を学ぼうと留学したのですが、これらだけにとどまらず近代文明にも関心が赴いたと思われれます。

『詩経』『礼記』『春秋』の他に、歴史書では『史記』『資治通鑑』『神皇正統記』等を学び、軍事書では『三国志』『十八史略』『源平盛衰記』『太平記』等です。

また大山巖は生涯で3回も海外渡航をしています。最初は明治2(1869)年に27歳で渡欧し普仏戦争などを視察しました。次は翌明治3(1870)年にアメリカ、ヨーロッパを訪問する半年間の旅です。この間、造船所大砲製造所等を視察します。そして帰国8カ月後の明治4(1871)年11月から明治6(1873)年まで再度欧州に留学します。この間、フランスの士官学校を研修します。さらにオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会(1873・8)には1カ月の滞在の中に29回も会場を訪れたとの記録があります。最初は大砲をはじめとする兵器の事や兵学を学ぼうと留学したのですが、これらだけにとどまらず近代文明にも関心が赴いたと思われれます。

『詩経』『礼記』『春秋』の他に、歴史書では『史記』『資治通鑑』『神皇正統記』等を学び、軍事書では『三国志』『十八史略』『源平盛衰記』『太平記』等です。

また大山巖は生涯で3回も海外渡航をしています。最初は明治2(1869)年に27歳で渡欧し普仏戦争などを視察しました。次は翌明治3(1870)年にアメリカ、ヨーロッパを訪問する半年間の旅です。この間、造船所大砲製造所等を視察します。そして帰国8カ月後の明治4(1871)年11月から明治6(1873)年まで再度欧州に留学します。この間、フランスの士官学校を研修します。さらにオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会(1873・8)には1カ月の滞在の中に29回も会場を訪れたとの記録があります。最初は大砲をはじめとする兵器の事や兵学を学ぼうと留学したのですが、これらだけにとどまらず近代文明にも関心が赴いたと思われれます。

『詩経』『礼記』『春秋』の他に、歴史書では『史記』『資治通鑑』『神皇正統記』等を学び、軍事書では『三国志』『十八史略』『源平盛衰記』『太平記』等です。

また大山巖は生涯で3回も海外渡航をしています。最初は明治2(1869)年に27歳で渡欧し普仏戦争などを視察しました。次は翌明治3(1870)年にアメリカ、ヨーロッパを訪問する半年間の旅です。この間、造船所大砲製造所等を視察します。そして帰国8カ月後の明治4(1871)年11月から明治6(1873)年まで再度欧州に留学します。この間、フランスの士官学校を研修します。さらにオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会(1873・8)には1カ月の滞在の中に29回も会場を訪れたとの記録があります。最初は大砲をはじめとする兵器の事や兵学を学ぼうと留学したのですが、これらだけにとどまらず近代文明にも関心が赴いたと思われれます。

『詩経』『礼記』『春秋』の他に、歴史書では『史記』『資治通鑑』『神皇正統記』等を学び、軍事書では『三国志』『十八史略』『源平盛衰記』『太平記』等です。

また大山巖は生涯で3回も海外渡航をしています。最初は明治2(1869)年に27歳で渡欧し普仏戦争などを視察しました。次は翌明治3(1870)年にアメリカ、ヨーロッパを訪問する半年間の旅です。この間、造船所大砲製造所等を視察します。そして帰国8カ月後の明治4(1871)年11月から明治6(1873)年まで再度欧州に留学します。この間、フランスの士官学校を研修します。さらにオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会(1873・8)には1カ月の滞在の中に29回も会場を訪れたとの記録があります。最初は大砲をはじめとする兵器の事や兵学を学ぼうと留学したのですが、これらだけにとどまらず近代文明にも関心が赴いたと思われれます。

『詩経』『礼記』『春秋』の他に、歴史書では『史記』『資治通鑑』『神皇正統記』等を学び、軍事書では『三国志』『十八史略』『源平盛衰記』『太平記』等です。

また大山巖は生涯で3回も海外渡航をしています。最初は明治2(1869)年に27歳で渡欧し普仏戦争などを視察しました。次は翌明治3(1870)年にアメリカ、ヨーロッパを訪問する半年間の旅です。この間、造船所大砲製造所等を視察します。そして帰国8カ月後の明治4(1871)年11月から明治6(1873)年まで再度欧州に留学します。この間、フランスの士官学校を研修します。さらにオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会(1873・8)には1カ月の滞在の中に29回も会場を訪れたとの記録があります。最初は大砲をはじめとする兵器の事や兵学を学ぼうと留学したのですが、これらだけにとどまらず近代文明にも関心が赴いたと思われれます。

『詩経』『礼記』『春秋』の他に、歴史書では『史記』『資治通鑑』『神皇正統記』等を学び、軍事書では『三国志』『十八史略』『源平盛衰記』『太平記』等です。

また大山巖は生涯で3回も海外渡航をしています。最初は明治2(1869)年に27歳で渡欧し普仏戦争などを視察しました。次は翌明治3(1870)年にアメリカ、ヨーロッパを訪問する半年間の旅です。この間、造船所大砲製造所等を視察します。そして帰国8カ月後の明治4(1871)年11月から明治6(1873)年まで再度欧州に留学します。この間、フランスの士官学校を研修します。さらにオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会(1873・8)には1カ月の滞在の中に29回も会場を訪れたとの記録があります。最初は大砲をはじめとする兵器の事や兵学を学ぼうと留学したのですが、これらだけにとどまらず近代文明にも関心が赴いたと思われれます。

物)としたのです。だから日露戦争の際に「秋山支隊が包囲されている」との報告が司令部にもたらされ、兎玉以下司令部総員が騒然となった際、愈々自ら出張るか否かを考え、咄嗟に敬慕する「兄さあ(西郷)だつたらどうするだろうか」と考えたのでしよう。そして自ら指揮をとるよりも、司令部の騒然とした雰囲気さえ冷静にできれば旨いくと考えたのです。だから司令部に入るや、わざととぼけた調子で「朝からだいぶオオツツが聞こえるようですが、一体どこですか」と聞きました。

総司令官が司令部の騒然としている状況がわからないはずがありません。しかし総司令官のこの言動で司令部に笑いが起こり、司令部の雰囲気は一変し司令員が冷静になれたのです。このように考えると、大山のとぼけた言動は西郷隆盛をロール・モデルとしながら考え抜いた言動だったのです。

この他にも大山が西郷隆盛をロール・モデルにしたと思われる話が残っています。

それは明治38(1905)年12月7日によく東京・穂田の私邸に凱旋帰国した大山に、息子の柏が「戦争中、総司令官として一番苦しかったことは何か」と聞いた際の答です。大山は次のように答えました。「若い者を心配させまいとして、知っていることも知

つまり大山は西郷隆盛を敬慕し、西郷をロール・モデル(お手本となる人

大山巖をはじめ薩摩の少年は、人格を形作る少年期にこういう教育システムを通じ、「恥を知り、卑怯を嫌い、公に尽くす心、リーダーとしての心構え」を培ったのです。

大山巖をはじめ薩摩の少年は、人格を形作る少年期にこういう教育システムを通じ、「恥を知り、卑怯を嫌い、公に尽くす心、リーダーとしての心構え」を培ったのです。

大山巖をはじめ薩摩の少年は、人格を形作る少年期にこういう教育システムを通じ、「恥を知り、卑怯を嫌い、公に尽くす心、リーダーとしての心構え」を培ったのです。

大山巖をはじめ薩摩の少年は、人格を形作る少年期にこういう教育システムを通じ、「恥を知り、卑怯を嫌い、公に尽くす心、リーダーとしての心構え」を培ったのです。

大山巖をはじめ薩摩の少年は、人格を形作る少年期にこういう教育システムを通じ、「恥を知り、卑怯を嫌い、公に尽くす心、リーダーとしての心構え」を培ったのです。

大山巖をはじめ薩摩の少年は、人格を形作る少年期にこういう教育システムを通じ、「恥を知り、卑怯を嫌い、公に尽くす心、リーダーとしての心構え」を培ったのです。

大山巖をはじめ薩摩の少年は、人格を形作る少年期にこういう教育システムを通じ、「恥を知り、卑怯を嫌い、公に尽くす心、リーダーとしての心構え」を培ったのです。

大山巖をはじめ薩摩の少年は、人格を形作る少年期にこういう教育システムを通じ、「恥を知り、卑怯を嫌い、公に尽くす心、リーダーとしての心構え」を培ったのです。

大山巖をはじめ薩摩の少年は、人格を形作る少年期にこういう教育システムを通じ、「恥を知り、卑怯を嫌い、公に尽くす心、リーダーとしての心構え」を培ったのです。

らん顔をしなければならなかった」と述べています。

このように大山は尊敬する西郷隆盛のように無限に水を湛える大海のように存在となるべく振舞ったのです。

5 おわりに

大山巖は「少年期の郷中教育」を通じて、また「青年期に多くの厳しい事(利他)を体験」とともに「器量が大きい人に直接触れ、それを真似る」とにより「将の器」を身に付けました。しかし現在の世の中には学習塾はあっても「郷中教育」を行っている所は稀有です。しかも国事に奔走しようとしても一介の青年が入り込めるような事変は有りません。

しかし郷中教育はなくとも読書はできます。経験を積むに値するような事変はなくとも、歴史を学ぶことにより追体験は可能です。

読書も歴史を学ぶことも、すべて追体験です。

この際、大切なことは『論語』にある「子曰く、学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し」(通釈・孔子がおっしゃいました。「学んでも考えなければ暗く(知識を生かせず)理解したものとはならない。考えればかりで学ばなければ危険である」に留意することです。

それは、どんなに沢山の本を読んだ

り、どんなに立派な先生から教えを受けても、自分で何故そうなのかを考慮理解しなければ、自分の力にはならないということ。西郷隆盛の物真似では大山巖大将の風格は出てきません。反対に自分で色々と考えを巡らせてばかりで、学ぶことをしなければ独善に陥ってしまい危険です。

すなわち、学ぶことと思う(考える)ことを双方行わなければ、自分の力にならないという教えです。

学校の勉強でも沢山の学習塾に行つたからといつても自分で考えなければ身に付きません。一方、自分一人で考えていても要領を得ないばかりか、間違つたことを良しとしている場合が出てきたり、偏つた考えに陥つたりします。両方をしっかりと行うことが大切です。特に、極端から極端に走りがちな青少年の頃に「思う」ばかりで「学ぶ」ことを怠りますと、包容力の無い円満さに欠ける危ういものになります。そうなりますと、自分では「良し」と思っていますから世間が間違っているのではと考えはじめ、だんだんと自己撞着に陥つてしまいます。

なお蛇足ながら、リーダーシップは組織の目的・大きさ、仕事内容、組織員の数・質、時間的要求等により、しかもリーダーによつても、そのやり方が千差万別です。同じリーダーでも組

織が変われば、同じやり方で行つても旨いきません。大山巖大将のような統率は部下を優秀な人材に育てあげるとともに厳しい訓練を通じ組織を強くし、並大抵の事なら放つておいてもスムーズに処理できるように育てておくことが前提です。形だけの猿真似のリーダーシップでは旨いかならないことは自明であることを、取って付け加えておきます。

最近、我が家を孫が訪れるたびに、その成長の速さに驚くと共にこの時期の成長が人として著しいことを痛感します。そしてあらためて少年期や青年期の「学び」がいかに大きいかを再認

識する次第です。皆さん! 「少年老い易く、学成り難し」です。「若い時の苦労は買ってでもしろ」ですよ!

【参考図書】

- ・日本の戦争 桑田悦・前原透 原書房
- ・「大山元帥」二反長半 富士書店
- ・「大山元帥」西村文則著 忠誠堂
- ・「将の器」参謀の器 童門冬一 青春出版社
- ・「坂の上の雲」司馬遼太郎 文春文庫
- ・福島原発事故独立検証委員会ヒアリング記録
- ・福島原発事故 政府事故調査委員会ヒアリング記録

お墓に関する ご相談承ります

- ①霊園・寺院のご紹介
- ②お墓の引越(改葬)
今話題です。地方から首都圏へ
- ③お墓のリフォームなど

会員の皆様には
割引特典
がございます。



※但し、割引が適用できない場合もございます。

ご相談は無料です。まずはお気軽にご連絡ください。

創業明治38年 須藤石枝

霊園・墓石の

—— 首都圏・京都・大阪・名古屋・金沢・福岡・札幌 ——

0120-053-827

〒171-0014 東京都豊島区池袋2-3-1(須藤ビル)
TEL: 03-3982-3333(代) FAX: 03-3982-1126
Web: <http://www.sudo-sekizai.co.jp/>

業界No.1